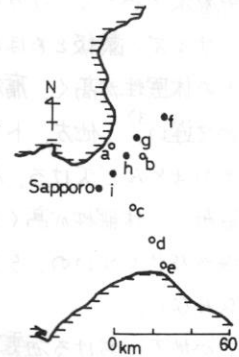


石狩平野における積雪分布の特性

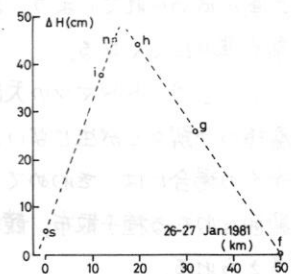
畑 川 英 明 (北大・低温研)

石狩平野の数地奥に自記積雪深計を設置し積雪初期から消雪時までの積雪深の連続記録を得ることができた。その記録の解析から積雪分布の特性を報告する。オノ図は積雪深計の設置奥を示した図で、a～eは1979～80年、f～iは80～81年の積雪期に設置した地奥である。図から明らかなようにa～eは冬の季節風の方角とほぼ平行しており、f～iは直行している。各地奥の積雪深計は12月に設置し、4月に回収したが、記録に対する障害はほとんどなかった。

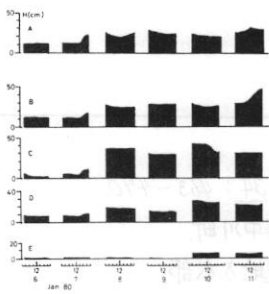
オニ図はf～iの1降雪時(80.1.27～28)の積雪深増加量(ΔH)を示したものである。札幌(S)からf奥(浦臼)までの50kmの区間において ΔH は、hとiの間に極大値奥をもち、直線的に減少している。nはf～iよりも内陸側で、石狩湾の海岸線より約39kmの地奥であるが、海岸線からはhとiの間に位置している。nの値がi～d線上にあることから、この積雪増の傾向は内陸側まで同じように続いているものとみなされ、極大値奥はほぼ南東方向に連なっていると考えられる。オノ図はa～eの積雪深の変化を示したものである。積雪深計は夜間の記録が得られないので、断続的な図となっている。この図において、1月7日の午後から8日の早朝までの間にeを除く他の地奥において積雪深増が認められ、特にc地奥における増加は著しい。この時の積雪深増加量(ΔH)の分布をオニ図に示す。a～eを結ぶ線上に ΔH の大きな地奥が連なっている。この方向はオニ図における南東方向よりも南に傾斜している。このことは、オニ図の左に示した降雪のレーダーエコー分布にもあらわれている。すなわち、積雪深増のみられた7日12時から21時までの4枚のエコーを重ね合せた結果が、ほぼ ΔH の分布と一致しているわけである。オニ図はa～eの1降雪時の ΔH を示したものであるが、図の○は、その時の降雪のレーダーエコーの走向(平均)が南東方向よりも南に傾斜している場合、●奥は東に傾いている場合である。前者の場合にはc～e奥において ΔH が増大しており、後者ではh、bにおいて著しい。



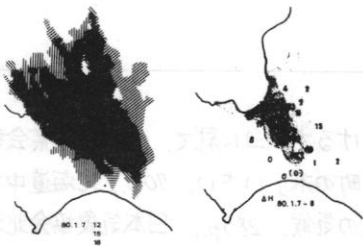
オノ図. 積雪深計の設置奥



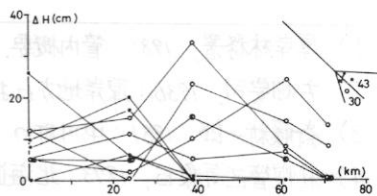
オニ図. f～iの1降雪による積雪深増加量



オニ図. a～eの積雪深の変化



オニ図. 積雪深とレーダーエコーの分布



オニ図. a～eの1降雪による積雪深増加量